小学４年生を対象としたバリアフリー授業の実践と振り返り
横山第一小学校４年３組の事例

ractice and consideration of education to understand disability for 4th grade elementary school students
—Case study of Yokoyama Daiichi Elementary School 4th grade class 3

淺見眞也,川島彩佳,呉岡亜美,恒冨小雪
指導教員：眞保智子

法政大学　現代福祉学部　福祉コミュニティ学科　眞保ゼミ

キーワード：バリアフリー,心のバリアフリー,社会モデル

1. はじめに

小学生を対象に共生社会に向けて重要な考え方である「バリアフリー」について伝える法政大学現代福祉学部眞保ゼミの活動は、コロナ災禍の最中である 2021（令和 3）年に始まった。2 月に大学近隣の八王子市立椚田小学校、緑が丘小学校、横山第一小学校のご協力を得て、バリアフリーに関するオンラインクイズを企画した。当時は家庭の通信環境が必ずしも整備されている状況ではなく、参加者は 3 名であったが、眞保ゼミ 6 期生の先輩たちは小学生の様子に大いに手ごたえを感じたと聞いている。

オンラインクイズイベントでご縁をいただき、横山第一小学校緒方礼子校長先生（当時）より、4 年生を対象に総合学習でのバリアフリー授業の提案をいただき、2021（令和 3）年 5 月 26 日に眞保ゼミ 8 期生が、翌年 2022（令和 4）年 9 月 12 日に眞保ゼミ 9 期生が授業を実施した。本発表では、2022（令和 4）年度に眞保ゼミ 9 期生が行ったバリアフリー授業の内容をご紹介するとともに、配布したワークシートをもとに授業の振り返りと今後の展望についてご報告する。

2. 実践研究方法

(1)対象：八王子市立横山第一小学校 4 年 3 組 29 名
(2)授業タイトル：「八王子市横山第一小学校 4 学年総合学習バリアフリーって何だろう」
(3)授業の目的：バリアフリーの理解を促す
(4)授業のめあて：①「バリアフリーについて理解しよう」②「みんなが暮らしやすい社会にするために今みんなができることを知ろう」
(3)ワークシートの質問項目：①バリアフリーについて知っていることがあれば書いてみよう　②バリアフリーって何だろう？今日の授業を受けて、わかったことや思ったことを書いてみよう

3. 授業内容

(1)内容

授業は主に、①バリアフリークイズの出題、②設備のバリアフリーと心のバリアフリーの紹介、③みんなにできるバリアフリーの紹介から構成した。

(2)教材

授業の目的を達成するため、教材づくりをするうえで以下の工夫を行った。①クイズやイラストを活用して視覚的な理解を促す。②心のバリアフリーと設備のバリアフリーの 2 つに焦点を当てる。これらの工夫に基づき授業を行ったことで、児童と双方向のコミュニケーションがとりながら授業ができることにつながった(図①参照)。

図①「八王子市立横山第一小学校 4 学年総合学習 バリアフリーって何だろう」より引用

4．ワークシートを用いた授業の振り返り

(1)分析方法

八王子市立横山第一小学校 4 年 3 組の児童 29 名の回答から、バリアフリーの理解度を測り、授業の改善について検討した。分析方法は質的調査法のオープンコーディングを用いた。質的調査法は、質的データの個別性・特殊性を重視し、収集したデータから調査対象の思想・考え方を分析する手法である。今回は、授業の振り返りシートの「バリアフリーって何だろう？今日の授業を通して分かったことや思ったことを書いてみよう」という質問に対して児童が答えた内容をもとにオープンコーディングを行った。その結果、8 つのラベルと 1 つの概念が生まれた。調査の流れとして、質問用紙からデータを収集した後、そのデータを意味のまとまりごとに切片化した。そしてラベリングの段階では、切片化した言葉を並べ、意味の類似性や関連性に注目しながら言葉をグループごとにまとめた。その結果、8 つのラベルにまとめられた。それぞれを表す見出しは、①人の役に立つ、②こころのバリアフリー③設備のバリアフリー④心の優しさ⑤必要性の理解⑥種類の幅広さ⑦対象者⑧積極的な態度となった。これらすべてのラベルを統合し、抽象度を高めた結果、「バリアフリーの理解」という概念がつくられた。

(2)分析結果

授業の 2 つのめあてを達成したか否かで理解度を測るため、①バリアフリーの定義の理解②心のバリアフリーの認知③心のバリアフリーの積極的な態度という 3 つの理解度の基準を設け、ワークシートの回答に「暮らしにくくさせるものをなくす工夫」に関する「役立つ」「便利なもの」「快適」「幸せ」などの言葉が含まれていたかどうかで判断を行った。

実際の生徒の回答には、「バリアフリーは不自由などのくらしをよりよくするためにある。」、「人に役立つこと」などが多くあり、バリアフリーの定義をよく理解していることが伺えた。また、「心のバリアフリーは、今すぐ出来るから困っている人を助けたいです。」といった、心のバリアフリーを認知し、実践に積極的な態度を見せた回答も見られた。

児童の自由記述に基づいた質的調査の結果であるため、クラス全体の理解度を割合で示すと高くはないが、実際の授業の中では児童に一定の知識の浸透が見られた。

(3) 考察

分析結果から、バリアフリーに理解を示した回答には心の優しさについても記述されていることが多く、その二つには密接な関係性があることが示唆された。また、心のバリアフリーに関しては、具体的な行動を記述することで理解を示していた回答も多かったことから、児童にとって想像しやすい場面や行動を提示しながら説明を行うことが理解の促進に効果的であると考察した。

以上のことから、バリアフリーの理解を促すためには一方的な伝える授業ではなく、児童と講師、児童同士が互いに学びあう授業形態がもっとも適していると考えた。

5．授業の展望

今回行った授業ではグループワークの時間が不足し、グループの結論が出る前に次の内容に進んでしまう場面があった。しかし、児童が自由に意見を出し合う時間は理解の促進に必要不可欠であるため、グループワークにかける時間をより多く設け、結論をクラス全体で共有できるように授業構成を見直す必要がある。また、伝わりにくいと感じた表現に関しては、児童の意見を取り入れながら表現を変えていき、児童と共に作り上げる授業を展開していきたい。